

新たな仲間と「地域デビュー」

みんなが平等

男の生き方研究会…まずパソコンと料理に挑戦

40年近くも朝から晩まで職場で過ごしてきた「会社人間」が、退職後に身を置く場所は自宅周辺の地域社会。しかし、これまで地域とのつながりが希薄な彼らにとって、会社とは違う社会の仕組みやルールに戸惑うことも多く、大変のようだった。そんな中、第二の人生の舞台を地元で設定し、「地域デビュー」を歩み始めた人がある。(梅本 リエ子)



「地元での生活が何となく波に乗りつつあるんですよ。それが結構、楽しいんだ」
57歳で長年勤めた大企業をリタイアした奈良市の芦田信次さん(60)は、最近の自分を振り返って少し満足気な笑顔をみせる。「リタイアし、第二の人生を生きる(生きていく)」という同じ境遇の人と「男の生き方研究会(男生研)」を結成したことが、地域で生きる足固めになり、それが順調に育っているのだ。

「長年、会社に依存した生活やっていたし、会社を離れた後の生き方に多少の不安があったからね」
実際の定年は60歳だが、3年前に50歳以上を対象に「早期退職制度」が打ち出され、「会社に残るのは精神的に厳しい」と退職の道を選んだ。

しかし、「会社大好き人間」と言ってしまうのではない芦田さんにとって、「57歳でリタイア」は想定外のことで、第二の人生への移行にはいろいろと

準備不足だった。取りあえず退職し、これからの生き方を模索。結果、行き着いたのが「社会に貢献しながら地域で生きる」こと。手探りで出した答えだけに、仲間づくりに成功したことがうれしかった。

「仲間づくりのきっかけが

今、大概の自治体は団塊世代の大量定年対策として、地域での生き方を指導する講座を開いている。奈良市も同じで芦田さんはそのセミナーに参加。終了後に、誰ともなくグループ結成の声が上がった。その誘いに響いて手を上げた。

「普通のおっちゃん」になって交流



「男生研」の仲間にはパソコンを教える芦田さん(中央)。
新たな人間関係が育ちつつある。

現役時代には味わえない充実感

けになったのは奈良市の開く「男の生き方セミナー」。3日間だけの講座でのつき合いなのに、終了後に「グループを作ろう」と声が上がってね」

「男生研ではまず「何をしようか」からの出発。したいことを相談し合っていて、取り組むよ」
「人生の広がる予感がするパソコンを習得したい」「料理も覚えたい」「ボランティアにも取り組みたいよ」。仲間たちは次から次へとやりたいことを口に出す。「パソコンは得意だから講師役に立

験のない者はかりなのにこの冒険。それでも当日にはレシドを配り、あたかも「料理は得意やねん」なんて顔して先生役をフリア。芦田さんも「教えなあかんのやから」って必死。女房に教えてもらい、当日に挑むんです」と照れ笑する。

次回(12月11日)は舞台でミュージカルを演じる大阪府和泉市の川口謙治さんです。

「できあがった料理でみんなで一杯やるのが、また楽しいんですよ」
料理が作れるようになるし、仲間と酒を飲み交わす楽しさもある。地域の人とのこんな交流は現役時代には考えられなかったこと。仲間との心ふれあいに充実感を覚えるひと時だ。
「おばちゃんにならないう地域では生きられないよ」と女房に口酸つばく言われていますが、その通りだと思えるようになり「なりましたね」

地域で楽しく生活するための知恵は、おばちゃんの手伝い。田舎な地域デビューを果たすための鉄則を妻の邦子さん(57)は「地域はみんなが平等なヨコ社会で、企業のタテ社会とは違う。肩書は会社が与えてくれた役割だけのことで、地域には何の関係もないもの。地域では普通のおっちゃんやで」と説く。最初は耳障りを受け止めていたが、「少しは納得できるころ」と笑う。
「女房は「おばちゃん度30%」と手厳しいけど、いざれば…」

30%の理由は「好きなことしかしてへんから」と邦子さん。それでも「地域に溶け込む第一歩」と納得している。「地域の人と仲間になったのは初めてです。なんか初々しい自分に照れるんよ」と芦田さん。地域デビュー、ますます成功が、少年のような笑顔にしてくれている。

×王

「中年のための地域デビュー講座」を開いている宇都宮大学教授・廣瀬隆人さんが提唱する「地域デビュー」の勘所から案

- ① できること、したいことを探す
- ② 地域には部長も課長もない
- ③ 講座やセミナーに参加し、自分に投資を
- ④ 肩の力を抜き、「まあ、いいか」精神で
- ⑤ 常識は一つじゃない